吉川英治記念館案内図

資料２

展示室

谷口吉郎設計によるもの。

離れ

明治時代中頃に建てられた洋館風建築。
テラスに用いられているのは珍しい“本業タイル”です。
吉川英治は青梅時代の前半にはここを書斎としましたが、後半の「新・平家物語」執筆時には母屋に書斎を移しました。
頻繁な転居と書斎の移動からは、英治が特定の環境に固執せず、常に変化を求めるタイプだったことが感じられます。

母屋

江戸時代末か明治初めに建てられたもの。
屋敷の旧主は養蚕農家で、それを昭和16年に吉川英治が買い取りました。
吉川英治は生涯に約30回、作家デビュー後だけでも10回転居しており、青梅の屋敷もそのひとつ。
転居を繰返した吉川英治は、主に借家に住んでいましたが、ここは例外的に買取った家で、そこに青梅移住への思いが伺えます。

井戸

吉川英治が随筆でも触れた名水の井戸。（現在は水質検査を行っていないので飲用禁止です）。

蔵

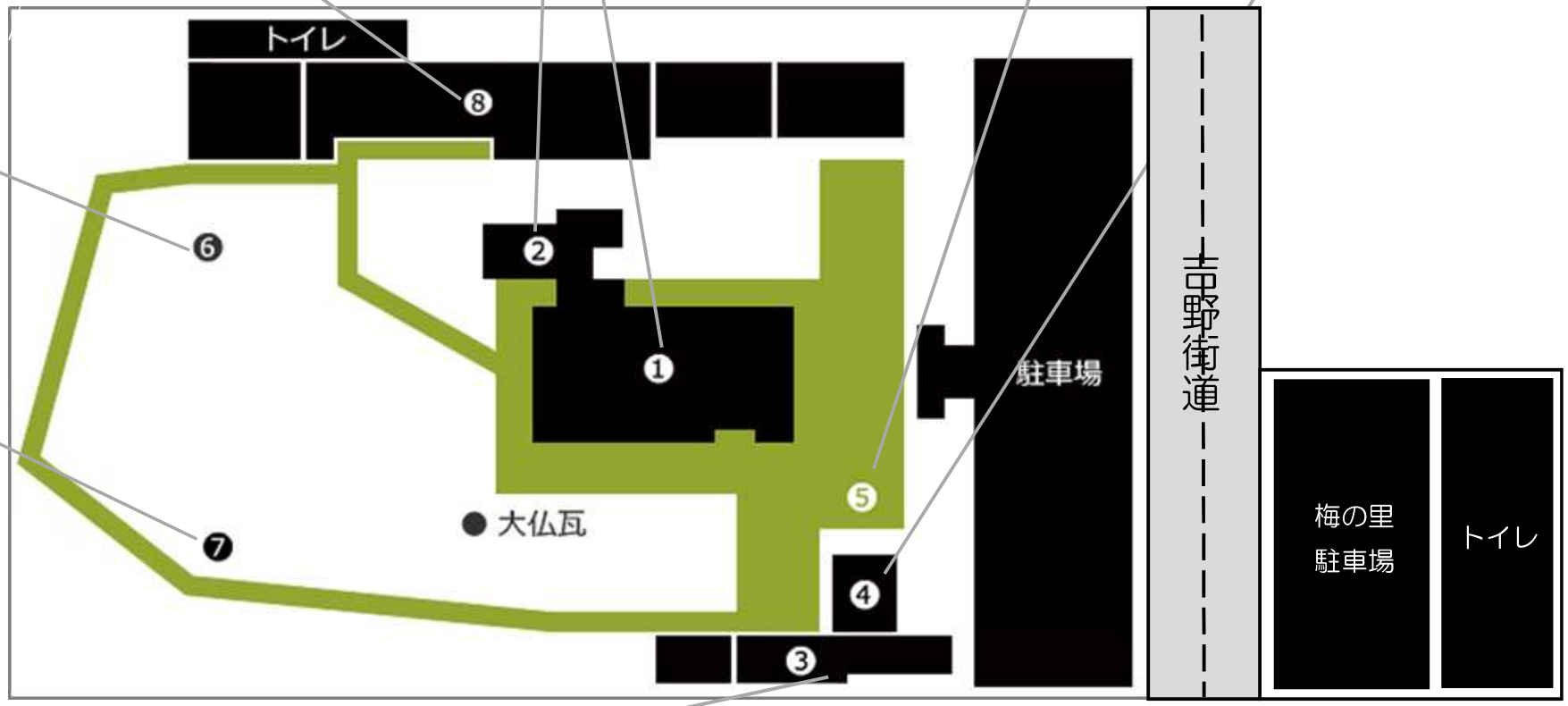
棟札に「弘化四年」（1848）と書かれており、江戸時代末の建物とわかります。

椎の木

樹齢500～600年と推定される巨樹。
吉川英治はこの木の下で野点を楽しむこともあった。

遊歩道

遊歩道で庭園内を歩くと、四季折々の花が楽しめます。

長屋門

袖部屋を持った門で武家屋敷や豪農の屋敷に見られます。
吉川英治の住んでいた頃は一方は書庫、一方は納戸にしていました。
納戸側には戦時中は防空壕があったそうです。
現在は入館受付とミュージアムショップになっています。
看板の「吉川英治記念館」の文字は東山魁夷の揮毫によるものです。